42号

愛鳥教育

1993.3

全国愛鳥教育研究会

神奈川県秦野市立北小学校　4年　古谷直也

愛鳥教育　No.42
1993.3

目　次

巻頭言 ----------江袋島吉　3
インフォメーション　BOOKS
秋期研修会報告報告 ----------増田友紀子 4
第２７回全国野生生物保護実績発表大会
----------島田利子　6
論説
「野鳥観察と愛鳥教育　ーより深く
鳥とかかわるためにー」 ----------平田寛重　10
愛鳥教育資料
「野鳥観察チェックポイント」 -----平田寛重　11
国語授業実践報告
「谷津干潟の生き物たち」の授業から
----------島田利子　16
「谷津干潟の生き物たち」の授業に参加して
----------国松俊英　20
むらの理科ことはじめ（15）
「サクラの花びらは散る」 ----------金井郁夫　21
編集後記----------22
愛鳥クイズ----------23

巻頭言

珍禽と四不像の保護区を尋ねて
ー第３次中国視察団の一員に加わってー

会長　江袋　島吉

昨秋の１１月中旬に、中国江蘇省及び同省野生生物保護協会の招きを受け、日中野生生物保護・愛鳥教育交流会議の第３次視察団の一員として、１０日間の予定で同地を訪れた。

おもな行程は上海～蘇省～無錫～常州～錦江～南京～揚州～泰州～興化～塩城・射陌県～同大豊県～海安～常熟～上海で、全コースを差し回しの車で回ったが、特に後半は強行軍だった。

解放経済の影響で、著しい変化発展の姿が至るところに見られ、熱気ムンムンたるものがあった。

蘇州、常州、鎮江、南京、揚州など、歴史的文化的に有名な街々や、数ヶ所で見られた野鳥の群れ群れも印象的だったが、ここでは訪問の主目的である塩城沿海湿地帯珍禽自然保護区（射陌県）と、四不像保護区（大豊県）について述べたい。

◆　珍禽自然保護区　～　射陌県。タンチョウ。

東端を黄海に接する一面のアシ原、射陌川をはじめ運河、クリークが縦横に走り、至る所に沼や干潟のある２８,０００平方Ｋｍの広大な湿地に加え、深さ３ｍまでの海面も含まれている。

湿原は、海水と塩水が干潮によって入り混り、水生動物、同植物、貝類や魚類の宝庫で、１９目、５４科、２６３種類の野鳥が生息している。タンチョウ、マナヅル、クロヅル、ソデクロヅル等５種のツル、コウノトリ、ハクチョウ、ガンの仲間、カタジロワシ、オジロワシ、オオノスリの類、ヘラサギ、タゲリの群などが去来しているとのこと。

タンチョウは約８８０羽が越冬中（世界一で総数の約半分）だそうだ。ちなみに第二位の釧路湿原（約１１,０００方Ｋｍ）は約４６０羽である。

研究所から相当離れた海岸よりの所に、中国風の新しい観測舎の建物があって、数羽ずつのタンチョウの群れが遠く近くを飛び交い、時として大群（５０～６０羽）が黄海に向かうのが見える。

また、近くの保護舎にはタンチョウ、マナヅル、ヘラサギ、コサギ、ハクチョウ、ハイイロペリカンなどが保護されていて、人工孵化のタンチョウやペリカンが愛敬を振りまいていた。

再び研究所に戻り、心温まる歓迎の宴に感謝・感激の念を新たにして、次のコースへと向かった。

◆　四不像保護区　～　塩城市大豊県

中国には世界的に貴重な熊猫（パンダ）、朱鷺、緑毛亀、馬鹿、その他の動物が多い。四不像と呼ばれている麋鹿（ミール）もその一種で、タンチョウの保護区に隣り合った南側にあり、形状は全く同じで、広さは約１２,０００平方Ｋｍある。

四不像は１３世紀の頃から、北京郊外にある皇帝の狩猟場“南苑”に飼われていた奇妙な鹿の呼び名で、民衆の目にふれることは無かった。

“角は鹿に似て鹿にあらず、顔は馬に似て馬にあらず、体はロバに似てロバにあらず、ひづめは牛に似て牛にあらず”この四つのあらずの“四不”が名前の由来で、学名はミズシカと言われている。

１８６５年に、フランス人の神父マルマン・ダビットが、番人を買収して手に入れ、故国に送った皮と頭の骨が反響を呼び、各地の動物園が入手を競った。動物の収集家として名高い英国のベドフォード公爵も１８頭を集めたが、この種だけが唯一生き残った。

“南苑”の四不像も、１８９４年の大洪水と、義和団の乱（１９００年）の時にやって来たヨーロッパ兵の犠牲となり、ついに絶滅した。

１９６８年、チェコスロバキアの動物研究者マイヤー・ボイドは、ベドフォード邸で四不像に出会って、中国の大地に帰したいものと考えた結果、１９８５年に２０頭を８５年ぶりに“南苑”に放した。その後、２年間で３５頭に増え、１９８７年に迎えた１８頭と共に、計５３頭となった。

１９８６年に、世界保護基金（ＷＷＦ）も中国林業部と協力の上、大豊県を保護区として、英国の５つの動物園から集めた３９頭を放し、それが２年後には６８頭に増えている。

４７.５ｍの観察塔からは、広大な湿原に散在する大小の群れが望まれ、足下の柵内には数頭が放されていて、つぶさに観察することができた。

湿原の水には、０.３％の塩分が含まれ、四不像の生息に適しているとのことであるが、いずれにしても、奇獣・異獣と言われている四不像を野生（半野生）の姿で見ることができたことは、この上も無い喜びであった。

秋期研修会報告

事務局　増田　友紀子

去る、１０月１０日（土）・１１日（日）に神奈川県足柄山系矢倉岳にて、秋期研修会が行われました。参加人数は、１０数名と少なかったのですが、子供達も数名参加してくれて、有意義な時を過ごすことができました。

プログラム

１０日（土）

「足柄ふれあいの村」に２時に集合。途中に食事等を含めて、以下の内容を行いました。

《各種ネイチャーゲーム（屋外にて）》

・自然観察ビンゴ……パーティ等で使われるビンゴの数字が、自然にあるもの（例えば、木ノ実等）になっている。

・カモフラージュゲーム……草木の間にいろいろな物を隠し、それを探すゲーム。

・サウンドマップ……耳で聞こえる音を自分の表現したい方法で地図に表す。

《ブローチ作り（屋内にて）》

粘土で鳥の形を作り、ホットプレートで焼き固めてブローチにする。

１１日（日）

足柄ふれあいの村を１０時３０分に出発。足柄峠を経由して矢倉岳に向かいました。

《サシバ、ハチクマウォッチング》

ワシタカ類は、あまり見られませんでしたが、パラグライダーを楽しむ人々の様子を、鳥と同じ空を飛ぶこととして興味深く見ることができました。

参加していただいた皆様の御協力を得て、よい研修会とすることができました。ありがとうございました。皆様に簡単な感想文を書いていただきましたので、ご紹介します。（敬称略）

矢倉岳は、あっという間についてあっという間に終わってしまい、少し味気なかった。ハングライダーが印象に残った。もっと長くいたい。楽しかった。（津山　円）

今日は朝おきるのがたいへんで、それからすぐ朝めしをくうのはつらい。鳥のほうはすこし少ないような気がした。ブローチにはいちばん手をこった。またきたい。（小山　宗一）

一日目のゲームは、ビンゴ。自分のまわりの音をさぐるゲーム、自然の中から人工物を見つけだすゲームといろいろ楽しかった。人工物をみつけるゲームでは、けっこうもう点があったりして気づきにくい。保護色のあるものだともっと見つけにくいだろうと思う。あらためて、バードウォッチングのむずかしさを知った。

２日目は、サシバの群れも見られたし、パラシュートみたいなのがとびだすのも見られて感激した。本当に楽しくためになる２日だったと思う。ペンダント作りも、つかれたけど、おもしろかった！（津山　幾太郎）

今日ときのう、先生たちがいろいろネイチャーゲームや山のぼりをさして下さって楽しかった。また、しょくぶつの名前もわかってよかった。鳥もすごい名前どかおしえてくれてよかった。

（津山　来）

フクロウのブローチ作り、ほめられて、うれしかったです。（小山　瑞季）

ゆったりした時間の中に、自然に親しむゲームを楽しくでき、よかったです。矢倉岳へも登り、ハチクマを追いかけた気分が、また良かったです（見られるとよかったけど）。秋の花も、しっかりとながめることができました。ありがとうございました。（小山　ひより）

清里に続き、２回目の参加です。清里、足柄ふれあいの村と場所は違いますが、いつも暖かい雰囲気で私達を迎えてくださることをありがたく思います。やはり、会長さんをはじめとする役員の方々の熱意と心の広さは尊敬にあたいします。（本当です。）２日間、しっかり子どもにもどっ

て、いろいろな経験をさせていただきました。ネイチャーゲーム、ブローチ作りは、即、学校でやってみたいと思います。残念なことは、サシバをもう少し、しっかりと見たかったことです。でも、あの頂上は、別の楽しみもあり、満足です。どうもありがとうございました。（桐生　幸子）

はじめて知ったことの多い研修会でした。ふれあいの村という存在、ネイチャーゲームの本、ホットプレートでつくるブローチ、足柄峠（矢倉岳）の探鳥。どれもまた、これからの活動にできるだけ役立てたいと思います。企画運営ごくろうさまでした。ありがとうございました。

（江原　広美）

大変楽しい２日間でした。１６～１７名という小集団ということも、和気あいあいとして楽しい雰囲気でした。バッチ作りは、大人も子供も時を忘れて夢中になりました。私も久しぶりに童心に帰ったようでした。ネイチャーゲームも楽しかった。学校や地域で活用できそうです。矢倉岳は、条件が悪かったようですが、それなりにサシバらしきものが見られたり、大きな人工鳥も間近に見物でき、おもしろかったです。何よりもこの時期にここに来れば渡りが見られることを知っただけでも収穫です。途中の秋の草花も目を楽しませてくれました。こんな機会を与えて下さったことを感謝します。（津山　志保子）

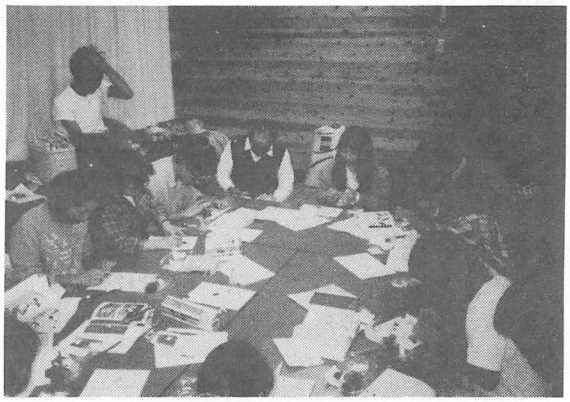
野鳥のブローチ作りの実際については、愛鳥教育No.41 (1993.1) に掲載しました。私としては、いろいろな人にどのような印象を持って取り組んでもらえるのかが知りたいところでしたので、今回の皆さんの感想をお聞きして、とても喜んでいます。

もともとは、小学生のクラブ活動の内容の一つとして、いろいろな方法を参考にしながら開発したものですが、大人の方にも喜んでいただけたことが何よりも嬉しいことでした。

それに、皆さんの作品は、それぞれに個性があり、作品としてとても生き生きとしていて、感心してしまいました。大人の方の作品は、色も形も実際の野鳥を想わせるほどの仕上がりですし、子どもたちの作品は、何のこだわりもない自由な発想にあふれていて、野鳥との親しみの様子がよく表されていました。

全体を通して質の高さを感じましたが、それはやはり、参加された皆さんが野鳥をはじめとした自然を愛し、普段から自然に親しむ活動に深く関わっている方々だったからではないかと思います。

21:00の就寝予定時間にもかかわらず、24:00になっても皆さんが熱心に制作されたのには頭が下がりました。（杉田　優児）



第２７回全国野生生物保護実績発表大会

常務理事　島田　利子

環境庁と（財）日本鳥類保護連盟の主催により、第２７回全国野生生物保護実績発表大会が、平成４年１２月７日（月）、環境庁合同庁舎講堂で行われた。

全国から書類審査の末選ばれた１０校の参加であるが、北は青森県、南は大分県と、各地域の特徴がおり込まれた発表内容であった。

発表は児童・生徒により、発表時間は２０分と決められている。その中で、活動をどのようにまとめたか、どこに中心を置いて発表したのか、また発表の仕方として、声の調子、態度、発表のための資料提示の仕方などの点にも注意が払われて審査が進められた。

受賞校とその活動内容

◆環境庁長官賞

＜栃木県二宮町立長沼小学校＞

自然のすばらしさを知り自然や動植物を愛する心を育てよう

野鳥・植物などの調査、それらを通した新聞作り、たよりの発行、聞きなし、方言調べ、全校での集会、足跡採取、カルタ作りなど、様々な活動を行っている。

また、クリーン作戦として、ゴミ投げ捨て防止の標語、立て札を設置し、野鳥の住みやすい環境作りを目指している。

作文、ポスターはもとより、集めたデータを生かし、統計グラフを作成するなど、熱心に取り組んでいる。

道徳の授業でも、動植物や自然を守るための話し合いなどを行い、心情面での育成を図っている。

多方面の活動内容や、小規模校ではあるが父母・全校・地域の連係が評価されたのではないかと思われる。

◆文部大臣奨励賞

＜神奈川秦野市立東小学校＞

自然にやさしい生き方をめざして

センダンタイム（ゆとりの時間）で行う自然とのふれあい活動を通して、環境の良さと問題点を知り、それらを基に愛鳥活動に目を向けた。

野鳥の調査、川の水質調査を同じ地点で行い、水質と野鳥と合わせて環境を知ることができた。

６年生全員でツバメの調査を行い、地域のツバメの生態を調べた。牛舎が多いので、ツバメに適していることなどを知った。

ホタルの飼育、放流。ミニサンクチュアリなど、自然の憩いの場づくりをした。

実のなる木の植樹、グリーンマーク、川を汚さないための呼びかけなどにも努力した。

環境教育的な面を含めた発表であった。

＜愛知県豊田市豊松小学校＞

自然に学び、自然を守る活動

鳥獣保護と緑化活動を中心にした進め方で、父母参加の探鳥会、鳥の声の聞き分け、姿見分けのコンクールを行い、野鳥を識別する力を養っている。

また、愛鳥新聞、巣箱、給餌台、カルタ会も行う。

学区に自然保護呼びかけ看板の設置、川の清掃なども行った。

学区全世帯へ依頼した野生生物の生息調査により、イノシシ、ニホンカモシカの増加が分かった。

人と鳥と獣が共存できる自然の創造につとめている。

鳥の生態を小さな窓からみつめ、広げていくのか。野鳥については、名前・姿・声を暗記してから、野鳥を識別するのか。これからの愛鳥教育を考えるためにどうであろうか。

◆林野庁長官賞

＜岐阜県岐阜市立金華小学校＞

金華小学校と愛鳥林学習

金華山を中心とした愛鳥林学習の歴史的背景の中で今まで活動を継続してきた。第二次世界大戦

のころ、工作の時間に巣箱を作ったのがの発端で、金華山が野鳥の楽園となった。営林署の方の指導を受け、巣箱かけを続けている。そして、植林したり、水飲み場も作った。これらを伝承していくようにする。

長い歴史、伝統に基づいて活動しているが、巣箱の数が把握できないこと、かけっぱなしであることが気がかりであり（特に針金でつけてあることなど）、金華山の自然を守る活動をもっと広い視野に進められると、さらに守り、盛んにできる手だてが多々見つかるように思う。

発表内容の読みは、劇場でおしばいを見ているような錯覚に陥るほどだった。

＜静岡県焼津市立益津小学校＞

地域の自然環境を生かした愛鳥活動

クラブを中心とした活動を行っている。ツバメの調査、カップラーメン容器でのヒナの保護がある。

また、野鳥の森の鳥の調査や巣箱かけを行い、巣箱の入口の大きさや、かけ方などにも注意をはらい、営巣の状態や破壊の理由などを調査した。江戸川での冬の給餌活動の際は、ＰＴＡも協力し、釣糸拾いも行った。

平成２年、ＰＴＡが昆虫ドームを作り、色々な虫の飼育をした。

ホタルの飼育では、人工の川をドーム内に作ったが、課題多い。

巣箱など利用調査は詳しく説明しているが、コシアカツバメの減少している訳、つり糸の量などの調査はまだのようであり、具体的に数量的に変化を見つめていくことが大切ではないかと思った。

◆日本鳥類保護連盟会長賞

＜大分県玖珠郡野鳥愛護少年団＞

わたし達の愛鳥

１９８１年、町立北小田中学校の愛鳥クラブの呼びかけで、愛鳥少年団が発足し、現在では、幼小中、合わせて７校、１０２名の団員がいる。１９９２年、「青い地球の少年クラブに指定された。

毎月第２土曜日に探鳥会を開催し、年１回はバスで他の地域に行く。また、全国一斉ガンカモ調査にも参加し、球磨郡野鳥目録を作成。

ツバメのねぐらの調査では、時刻、明るさ（ルクス）、数、様子の項目に分け、詳しく調査した。その結果、朝は、ツバメが３～４グループに分かれ、１０分足らずの間に飛び立ち、夕方は３０ルクスになると、トウモロコシ畑のねぐらにもどることなどがわかった。

また、学校の屋上にアオバズクの巣箱をかけ、無事育ったことなども印象的であった。

幼稚園児から中学生まで活動していることがすばらしいと思った。年間の活動内容をしっかりと計画し、目的意識を持たせるようにすることで、調査活動にも団員が興味深く取り組めるようになる。

学校教育の中だけではなく、地域でこのような活動をさらにさかんにしたいものだと思った。

◆環境庁自然保護局長賞

＜秋田県能代市立崇徳小学校＞

檜山の宝、崇徳園について

多賀谷氏の居館跡とその周辺を崇徳園とした。

生物の保護、観察、学習、運動、憩いの場としての役割を果たしている。

池を作り、学習で利用している。実のなる木も４５種以上７００本あり、落ちる実の量は何百キロとなる。春になるとカモシカも姿を現わす。

父母の夏草刈りでは、５００㎡は刈らずに、小鳥や自分達が実を食べるために残す。

全校での檜山の清掃もあり、広葉樹の多い崇徳園は色々な生き物が生息する。巣箱をかけ（利用率５０％）、調査している。

学年に応じた活動、勉強会が行われ、崇徳園を守り、育てていくことに努めている。

豊かな自然を身近に感じ、保護していく活動は、いずれ地球規模への考え方に通じると思う。自然の見つめ方、守り方をさらに研究し、小学生として納得し、生涯教育へとつなげてほしいと思った。

＜宮城県若柳町立若柳中学校＞

わが校における野生生物保護の実践

町内にラムサール条約の登録湿地である伊豆沼がある。川や沼の汚染が深刻となり、中学生として、かけがえのない自然保護の精神を、頭と体とで体験している。

川や土手の清掃、クリーンキャンペーンにも参

加。１２月～３月には白鳥のえさ集めも行う。学校に専門家や活動している研究家を招き、その講話を直接聞いている。動植物の生態、それらを守るための日々の努力などを知り、自然保護の大切さを強く感じとっている。

白鳥と共に生きるよう、自然保護活動を学校教育に位置づけている。

観光化が進んできている伊豆沼を守っていくことは大変だと思うが、若い世代に体験を通し、その大切さを知ってもらうことは、とても重要かつ必要なことである。白鳥を見た時の感動を広く伝えるためにもがんばってほしい。

◆日本鳥類保護連盟会長褒状

＜山口県油谷町立伊上小学校＞

みんな友達

学校前に広がる油谷湾には、５００羽の渡り鳥が羽根を休める。朝はミヤマガラスの大群と挨拶をかわす。

学校には飼育小屋があり、クジャク、キンケイ、コウライキジ、クロカシワなど１５種、６５羽の鳥たちがいて、全校５８名で世話をしている。毎日のえさ、３ヶ月に一度の大掃除など大変だが、糞が花壇の肥料となり、美しい花をさかせてくれたり、楽しい思いもあり、“仲間”として接している。悲しい場面にも会ったが、さらに野鳥と友達になりたいと思い、給餌活動や巣箱かけ、また、保護活動などを行った。ヤツガシラという珍しい鳥も見つけた。

鳥も人間も自然の中で生きる仲間であることを感じとっている。

飼育小屋での世話は、毎日のことでほんとうに大変であるが、体験をする中で小学生なりに、生き物との接し方、自然を見つめる目ができるのではないかと思う。心情面の発達もすばらしいと思う。しかし、「野生生物保護実績発表大会」という名の大会では、さて…と思うところもあった。

＜青森県三戸高等学校　自然科学部＞

三戸地方の野鳥とコウモリ類の保護と調査研究

自然科学部は、近くの城山公園をフィールドとし、野生生物の調査活動を行っている。

記録は部誌（現在まで２４号）に残しており多くのデーターが記載されている。

野鳥に関する記録は、２３年間で８４５回となり、パソコンで色々な項目を立てて集計した。増加型の多くは人里の鳥であり、減少型は山野の鳥であることがわかった。また、神社にある小舎には、ヒナコウモリがいて（日本最大のコロニー）、生徒は小舎のそうじを行う。その年に生まれたコウモリにバンディングをし、渡り、寿命などを調査している。また、広葉樹の森林に住むコウモリの保護に取り組み、巣箱を設置。今後は、その数を増やしていきたい。

とても詳しい細かいデータは、さすが高校生だと思った。しかし、スライドでは、そのデータが小さく、読み取りきれないのが残念であった。資料が配布されるとよかった。

以上、１０校の発表内容の概要を紹介したが、それぞれのすばらしい活動内容をどうまとめ、どのような手だてで発表するのかという点で考えさせられることがあった。

成績発表のあとの竹下鳥学会評議員の講評があったが、その主な内容は、

１．年々、レベルの平均は上がってきたが、今年は、やや下がった。環境教育を取り入れていく上での教師のとまどいがあったのではないか。

２．発表の上手・下手がある。内容が充実していても発表が下手であったり、またその逆の場合もあった。準備の必要性をよく知り、立派な内容を立派な形で発表することを目指してほしい

３．巣箱の扱いについては、利用研究はおもしろいが、限られた種類であることを頭に入れて保護活動をしてほしい

４．栃木・神奈川・静岡・愛知は、県大会を経てやってくるので内容が充実している。他の県でも行ってほしい。

５．学校教育の中で、環境とのかねあいで取り組んでほしい。

全体を通しての感想と主催者側に望むこと

「鳥類保護」から「野生生物保護」へと名称をかえて３年目の大会であるが、いくつかの疑問が残った。

環境問題を学校教育でも取り上げる現在、参加者側としては、「野生生物保護」へと範囲が広がったわけであるから、従来の鳥類保護から次のステップへと活動範囲を広げていくことが必要である。しかし、今大会での環境庁長官賞受賞校は、愛鳥活動がすべてであり、鳥に関するあらゆる手段をとり、活動していく内容である。ここ数年、環境問題にからめた発表内容が出てきつつあったが、今年は逆に戻ってしまったようにも見え、残念に思う。

しかし、これは、参加者側だけの問題ではなく、主催者側の考え方にも問題があるのではないだろうか。

まず、この大会の主旨や方向性がどのようなものなのかが明確でない。講評の中に、環境教育について現場がとまどっているという指摘があったが、現実にそうであっても、今大会の発表の中にも、それを学校独自に考え進めているところもあった。主催者として何を求めているのか、今回の発表のどこを認め、また何を不足とするのかについて、もう少し具体的に講評してほしかった。発表校としては、自分達の日頃の活動がどう評価されたのか、また、今後の方向性をどうとるべきか知りたいところであるが、それらに関する具体的な指示がなかった。学校現場の変化を見つめられる先生方に審査員として数多く参加してほしいと考えるが、いかがなものであろうか。

また、「野生生物保護実績発表大会」というメインタイトルがあるのに、「愛鳥のつどい」の大きな文字は考えさせられた。これは、大会会場に行って初めて目にする文字である。野生生物に目を向けていた学校、団体は疑問に思う所である。

今後、この大会を継続していくのであれば、参加する学校や団体にその主催の要旨が伝わるよう手立てを講じていただきたく、発表申込要項にも明確に記述してくださるよう願いたい。

次に、昨年までの大会では、参加者に発表校の内容が印刷された資料（とじ込みＢ５版）が配布されていたが、今年は配布されなかった。また、発表校のその他の資料や展示物もなく残念に思う。

主催者側に、当日の持ち方を明確にし、よりよい運営、会場作りに配慮することを望みたい。全国からの参加者に対して、参加してよかったと思えるお土産をいろいろな面から用意してほしいと思う。

また、発表校が使うスライドやＯＨＰについては、発表する側がセットするのか、主催者側がするのかがはっきりしないが、機器を用意する主催者側には、会場の広さに対して絵や文字の大きさが適切になるよう配慮してほしいものである。特にスライドは、スクリーンいっぱいに映るように、また、画面がいびつにならないように十分配慮していただきたい。今回は、画面が小さく、台形型の画面であったのが残念であった。発表する側に対して、映写に関する心配を和らげる配慮がほしかった。

会場は、毎回温度が低めで、寒い位なのも緊張を増すように思えた。日程的にも、もう少し早く終了させることも可能だと思うので考慮してほしい。

最後に、この大会の様子を知る機会がなく、この大会があることすら知らない学校、団体が多いように思う。新聞・テレビなどの報道機関にもアピールするなど、この大会に社会のより多くの関心が向けられるよう、様々な働きかけが必要であると考える。

地球規模で物事を考えていくべき世の中にあって、小学生からの活動はとても大切な歩み出しであり、それらの具体的姿をぜひ多くの人に知ってもらいたいものである。そして、そうした活動を生涯教育へと発展させていくためにも、今後この大会が発展的役割を果たしていくことに期待したいと思う。

論説

野鳥観察と愛鳥教育
ーより深く鳥とかかわるためにー

常務理事　平田　寛重

愛鳥活動を始めたばかりの学校では、「何をやったらよいかよくわからない。」といった声がよく聞かれる。また、愛鳥活動として「巣箱作り」や「巣箱かけ」には取り組んでみたが、それでおしまいという状況にとどまっている例も多いようである。中には、愛鳥という語感による連想から抜け出せないのか、いまだに「愛鳥＝家禽を飼育し、かわいがること」と理解している学校もある。どうも「愛鳥教育」そのものがよく認識されていないようなのである。野鳥を素材に自然のしくみを学んでいく機会としての愛鳥教育を、学校の教育活動の一部としてしっかり位置付けてもらいたいものである。

一時盛んに言われた「巣箱かけ・実のなる木の植樹・冬場の給餌活動」の３点セットも、形だけのこだわりにとどまり、その本質や必要性を考えずに、ハード面の活動でお茶を濁している例が少なくない。

一方、時代は確実に進んでおり、野鳥の研究や自然保護の考え方も充実してきており、従来に比べれば、愛鳥活動に役立つ情報も増えてきている。しかしながら、ソフト面での、野鳥を観察することによりどう自然を理解し、そのしくみをどう学ぶかということについては、未だにほとんど手がつけられていないのが実情である。

自然にふれ、感性を養い、自然と共に育ち、自然の仕組みを学び、そのよさを残していこうとする行動にいたる人間を育てるためには、もう一歩も二歩も踏み込んだ指導が必要になってくる。例えば、探鳥会などで言えば、「スズメがいた。」で終わるのではなく、「だからどうなんだ。」「どうしたらいいんだ。」まで考えるような自然学習の場を設定する必要がある。

愛鳥教育は、野鳥を通して自然のしくみを学んでいくことに大きな目的の一つがある。野鳥のくらしや生活から我々が何を感じ取り、彼らとの共生をどう図るのかを、常に頭に入れておく必要がある。巣箱をかけたり、給餌をしているだけでは、見えてこないものがたくさんあり、その見えてこないものを見つけていくことがこれからの愛鳥教育には必要とされているのである。

野鳥が対象のメインであることから、野鳥観察抜きの愛鳥教育はありえない。現状で行われているような単純な巣箱活動や給餌活動だけでは、観察の深まりは期待できない。

では、野鳥を観察することで何が見えてくるのであろうか。初めの頃は、「あ、スズメ。」「あ、キジバトだ。」程度でもよいわけであるが、いつまでもそれでは、鳥たちとのつきあいは深まらない。確かに、初めの頃は、名前にこだわらず、野鳥たちの姿やしぐさに感動をもつことができればそれでよい。そのことによって、野鳥の世界を知り、野鳥を見続けようという関心が高まればよいのである。

しかし、問題はその後である。多くの学校で実践されてきている野鳥観察プログラムはこの域から脱しきれず、悶々としていることが多い。少し専門的な知識や理解が必要になってくるので、特に小学校では、指導者がお手上げになってしまい、発展していかないといった場合が多々見られる。つまり、現在のプログラムでは、「野鳥に親しむ」段階からの壁が乗り越えられないために、愛鳥活動の主体が野鳥観察から離れて、周辺の活動に流れてしまうことが多いのである。

では、どうしたら野鳥観察で愛鳥活動が支えられるようになるのであろうか。それは、野鳥を観察することによって、野鳥たちが我々に送っているサインを読みとることなのである。これは、同時に、各自が野鳥とじっくりと向かいあう態度を形成することにつながる。地味な活動であり、効果もすぐには期待できないことから、なかなか教育活動として定着させることには困難な面もあろう。しかし、このようなことが大事なのである。

そこで、初めの頃は、現在の探鳥会のようにぞろぞろ歩くよりも、野鳥が確実に見られるような

フィールド（冬場の川や池のカモ類、餌台に集まる鳥など）で、数種の種をじっくりと観察して、彼らの身なりやしぐさ、まわりの環境、周辺の動植物たちとのかかわりなどを観察していき、新しく身聞きしたことをメモやスケッチで記録しておくとよい。このような活動は、慣れてくれば、観察者一人一人が自分の感覚で野鳥たちとかかわるようになっていくので、一人一人がそれぞれにかかわりを深めることができるようになる。また、このようにして集められたデータも、野鳥とのかかわりを深めるために活用することができる。

野鳥に限らず、この世に生きる生物たちは、その身なりやしぐさに皆それなりの意味があり、その行動様式が現在までの種の繁栄を可能にしたとも言える。動物行動学者でないにしても、観察したデータをもとに、それらの行動などを整理することによって、学校教育においても、小学校なら小学校なりの動物行動学的な取り組みが可能なのである。

従来、言われていたことを、自分たちのフィールドワークによって得られた情報によって確認していくことは、学習としても十分に楽しめるものになると思われる。現在行われているような、結果を早急に求めるような理科教育とは違った、地道な取り組みを通した自分たちとのかかわりの中で見えてくる自然を客観的にとらえることから、自然とのつながりが見えてくるのではなかろうか。

このことは、環境教育として考えれば、自然との出会いをつくったり感性を育んだりする段階の次にくる自然のしくみを学ぶ段階のプログラムとして位置付けられるものである。そして、これらの二つの段階を基にして、さらに行動の段階へと進んでいくことになる。

今まで述べてきた、野鳥とかかわりを深めるための野鳥観察プログラムの初期の段階のヒントとしては、この号の付録（松原巌樹氏の原画による身近な野鳥の実物大図鑑）と、それに付属した「野鳥観察チェックポイント」の表を参考にしていただきたい。

野鳥観察チェックポイント

常務理事　平田　寛重

今回、特別付録として作成した松原巌樹氏の原画による身近な野鳥の実物大図鑑を活用するための資料として、「野鳥観察チェックポイント」を表として取りまとめてみましたので、ご活用ください。なお、取り上げた種は図鑑に載っている12種に限定しました。また、これを作成するにあたり、浜口哲一氏の「とり」文一総合出版刊及び日本野鳥の会神奈川支部編集「神奈川の鳥１９８６－９１」を参考にさせていただきました。

探鳥会の折りなど、鳥を見て、「あ、シジュウカラ。」「あ、キジバト。」「また、スズメだよ。」といった声がよく聞かれます。しかし、これではいけません。「スズメがいたよ。」・・・・・だから何なの、スズメがどうしたの、何かしているの、かわったスズメなの、どうしてそうなったの、というようにスズメが見えたことから、スズメが送ってくれるサインをいかに読みとるか、まわりの環境とどうつながっているのか、双眼鏡の向こう側でスズメがしている行動はどんな内容でそれが何を意味するのかなど、観察を通して身につけてほしいことはたくさんあります。

単なる識別から一歩踏み出した、より深い観察を目指すバードウォッチングへと質的変換を図るためにも、この表を役立ててください。

内容的には、形態と行動の両面から構成してあります。また、範囲としては、低学年の児童でもわかるものから、かなりの観察を経験しなければわからないものまで入れてみました。

この表のチェックポイントを参考にしながら、野鳥を観察してみましょう。その際、野鳥を観察した年月日、また、野鳥のいた場所や環境、野鳥のしぐさや様子などもメモしておくと、後々、学習に活かすことができます。ただ見聞きしたら印をつけるだけでなく、より深く野鳥とかかわりを持ち、鳥の形態や行動から鳥の出しているサインを読み取ることを目指しましょう。これからのバードウォッチングは、種の数を追うことよりも、種から出されるシグナルを追うことを中心課題にしていくべきではないでしょうか。

もちろん、これらは、野鳥を深く見ていくためのヒントの一例に過ぎません。あなたなりのポイントを、さらに探し出してみてください。

観察ﾁｪｯｸ.TBL　　〈 1 〉

野鳥観察チェックリスト

	種名	ﾚﾍﾞﾙ	ｼﾞｬﾝﾙ	チェック内容	備考
1	スズメ	低	形態	ほほの黒いほくろマークを見た	
2		低	形態	喉の黒い模様を見た	
3		低	行動	両足を揃えて歩く	
4		低	行動	いくつかの異なる鳴き声を聞いた	鳴き声？
5		中	行動	砂浴びをしているのを見た	
6		中	行動	巣材運びを見た	どんなものを口にくわえていたか？
7		高	行動	虫を食べるのを見た	種類？
8		高	行動	集団で集り、鳴くのを見聞きする	
9		高	形態	幼鳥と成鳥の区別ができる	
10	メジロ	低	形態	目のまわりの白い輪を見た	
11		中	行動	花の蜜を吸う	花の種類？
12		中	行動	巣材をくわえる	種類？
13		高	形態	すずめより小さいことがわかる	
14		高	行動	木の実を食べる	実の種類？
15		高	行動	水浴びをしているのを見る	
16		高	行動	樹液をなめる	木の種類？
17		高	行動	囀りを聞く	鳴き声？
18	シジュウカラ	低	形態	胸のネクタイ模様を見る	
19		低	生態	ツツピーと囀りを聞く	あなたの聞いた鳴き声は？
20		中	形態	雨覆の白線が１本あることを確認する	
21		中	生態	餌をくわえて飛んでいるのを見た	餌の種類？
22		中	生態	ジュクジュクジーと地鳴きを聞く	あなたの聞いた鳴き声は？
23		高	形態	胸のネクタイ模様で♂♀の区別ができる	
24		高	形態	首の後が白いことを知る	
25		高	生態	地上で餌を採っているのを見る。	

野鳥観察チェックリスト

	種名	ﾚﾍﾞﾙ	ｼﾞｬﾝﾙ	チェック内容	備考
26		高	生態	他の種との混群で行動しているのを見る	他の種？
27		高	生態	幼鳥・成鳥の違いがわかる	
28		高	生態	ヒマワリの殻を足で押えてくちばしで中身を取りだして食べる	
29	カワラヒワ	低	形態	飛ぶと翼に黄色い模様（翼帯）が見られる	
30		低	生態	ヒマワリに止まり、実を食べる。	
31		低	生態	ビーンという声を聞く	あなたの聞いた鳴き声は？
32		中	形態	肌色のくちばしがわかる	
33		中	形態	尾羽の中央がへこんでいるのがわかる	
34		高	生態	くちばしをぬぐうのを見た	くちばしをこすりつけたもの？
35		高	生態	草の実を食べる	草の種類？
36	ヒヨドリ	低	形態	目の下の赤ぽいマークがわかる。	
37		低	生態	鳴きながら飛ぶのを見る。	鳴き声？
38		低	生態	波型を描いて飛ぶのを見る。	
39		中	生態	花の蜜を吸う	花の種類？
40		中	生態	異なる鳴き声を複数聞く	鳴き声？
41		中	生態	人工食物を食べる	人工食物の種類？
42		高	生態	木の実を食べる	木の実の種類？
43	ムクドリ	低	形態	黄色いくちばしを見る	
44		低	形態	目のまわりの白い模様を見る	
45		低	形態	腰の白い模様を見る	
46		低	形態	足の黄色を確認する	
47		中	形態	飛ぶ姿を見る	
48		中	生態	一直線に飛ぶ	
49		高	生態	集団で集るのを見る	
50		高	生態	集団で飛ぶのを見る	
51		高	生態	水浴びを見る	

野鳥観察チェックリスト

	種名	ﾚﾍﾞﾙ	ｼﾞｬﾝﾙ	チェック内容	備考
52		高	生態	鳴き声を聞く	鳴き声？
53	キジバト	低	形態	首の縞模様を見る	
54		低	生態	デデッポーと鳴き声を聞く	あなたの聞いた鳴き声は？
55		中	形態	赤い目を確認する	
56		高	形態	尾羽の先の白い帯を確認する	
57		高	生態	日光浴をしている	
58		高	生態	雨浴びをしている	
59		高	生態	ディスプレイフライト（巣の近くでゆっくりと旋回する）を見た	
60	ハシボソガラス	中	行動	頭を下げて鳴くのを見る	
61		高	形態	ハシブトガラスとの違いがわかる	
62		高	行動	ガーガーとにごった声で鳴くのを聞く	あなたの聞いた鳴き声は？
63		高	行動	食べ物を隠すのを見た	隠した物は？
64	ハシブトガラス	低	行動	ゴミを漁っているのを見た	
65		中	行動	尾を上下に振って鳴く	
66		中	行動	集団でいるのを見た	場所（環境）？
67		高	形態	でっぱった額がわかる	
68		高	行動	アーアーと澄んだ声で鳴く	あなたの聞いた鳴き声は？
69	ツバメ	低	形態	左右にとがった尾羽を確認	
70		低	形態	額が赤いのを確認	
71		低	形態	喉が赤いのを確認	
72		低	行動	巣作りを見る	
73		低	行動	囀りを聞く	鳴き声？
74		低	行動	糞をくわえているのを見る	
75		低	行動	巣で卵をだくのを見る	
76		低	行動	ひなが巣の外に糞を出すのを見る	
77		低	行動	初認	いつ？
78		中	行動	巣材をくわえている所を見る	何をくわえていたか？
79		中	行動	2番子の子育てを見る	

観察ﾁｪｯｸ.TBL　　〈 4 〉

野鳥観察チェックリスト

	種名	ﾚﾍﾞﾙ	ｼﾞｬﾝﾙ	チェック内容	備考
80		高	形態	尾羽の長さで♂と♀の違いがわかる	
81		高	行動	巣の下の糞を調べて、雛が何を食べているかがわかった	食べ物？
82		高	行動	巣立ちビナへの給餌を見る	
83		高	行動	アシ原で集団を見る	数？
84		高	行動	終認	いつ？
85	ジョウビタキ	低	形態	オレンジ色のお腹を見る	
86		低	形態	羽の白い紋を確認	
87		低	行動	初認	いつ？
88		中	行動	カッカッと地鳴きを聞く	あなたの聞いた鳴き声は？
89		高	形態	♂♀の違いがわかる	
90		高	形態	腰と尾羽のオレンジ色を見る	
91		高	行動	♂同志、♂♀の争いを見る	
92		高	行動	囀りを聞く	鳴き声？
93		高	行動	鏡に写る姿に攻撃するのを見る	
94		高	行動	終認	いつ？
95	ツグミ	低	形態	白い眉線（まゆげ）を確認	
96		低	行動	胸を張った姿を見る	
97		低	行動	クワックワッと地鳴きを聞く	あなたの聞いた鳴き声は？
98		低	行動	初認	いつ？
99		中	行動	池上で餌を探すのを見る	種類？
100		高	形態	お腹の鱗模様がわかる	
101		高	行動	木の実を食べる	種類？
102		高	行動	虫を食べるのを見る	種類？
103		高	行動	終認	いつ？

児童文学者　国松俊英先生の国語教材

「谷津干潟の生き物たち」（学校図書５年国語「下」）の授業から

常務理事　島田　利子

１．はじめに

平成４年度、新指導要領に基づき、教科書会社の教材の選択方法、考え方も変わり、各社それぞれに特色を明らかにしてきている。

そのような中で、愛鳥教育とのかかわりから、「谷津干潟の生き物たち」の単元の指導に取り組んでみた。

この教材・単元を取り上げるきっかけになったのは、児童文学者国松俊英先生との出会いがあったことによる。

国松先生には、私の勤務校（神奈川県秦野市立北小学校）へ、わざわざ足をお運びいただいたことがある。そして、自然観察クラブの活動にご一緒していただいたり、教員だけでなく児童達にも、色々なお話をしていただいたりしたことが、とても印象に残ったのである。

北小学校へ来校された時には、クラブ活動の時には、双眼鏡を持参され、野外では、ヒバリの声をじっくりお聞きになったり、桜の木に聴診器をあて、“音”を聞かれたりなど、熱心に参加された。また、クラブの児童に、中西悟堂氏の子供の頃の生き方を話してくださったりして、とても親しみを感じることができた。

教室でも、給食を共にされたり、色々なお話をしてくださったので、私自身も大変勉強になった。また、著書も多く戴き、クラスの児童に読み聞かせをし、児童と共に感動もした。また、学年でも講話をお願いし、４年生全員に野鳥に関するお話として、鳥島のアホウドリのことや、佐渡のトキのことなど、貴重な体験を、とても詳しくお聞きすることができた。児童達も、国松先生が体験された多くのことを、息をのむようにして聞き入っていた。

そのような出会いが、きっかけとなり、本校で使用している教科書とは出版会社が異なってはいるが、「谷津干潟の生き物たち」を扱うことになったのである。

授業を計画するにあたっては、管理職はじめ、学年の先生方に前もって内容を説明し、計画案を提示した。その際、気持ちよい賛同が得られたこともあって、私自身、意欲的に取り組むことができた。

２．教材観より

本校は、丹沢山系の麓に位置し、山里の鳥に親しむ機会は多いにあるが、この教材で扱われている干潟の鳥となると、児童は、ほとんど見た経験がなく、登場する生き物たちについても、予備知識が少ない。環境の違いから、教材をすぐに読み取ることはむずかしいので、指導計画の段階で、事前に自分達の知らない鳥や生き物について調べさせることにした。

このことは、教育課程の中で、身近な環境と異なった内容を学習する単元については、同じように考えられると思う。教師は、教材の扱い方、時間的工夫に意を懲らし、十分な資料を用意し、児童が興味を深くし、納得し、感動する場面を与えられるよう計画しなければならない。また、児童も児童なりに知識を深める方法、手段を考えていかなければならない。

３．指導計画を立てるにあたって

本教材を児童に与える時、最も留意しなければならないのは、「干潟」というものを理解させることだった。

そこで、本文に出てくる生き物について、グループごとに種別に調べることを計画した。

本文に出てくる生き物は、野鳥では、シギ、チドリ、ダイゼン、メダイチドリ。生物では、ヤマトオサガニ、コメツキガニ、ゴカイ、アシナガゴカイ、ヤドカリ、チゴガニなどである。

この段階で、児童は、シギ、チドリをさらに詳しく調べたいと意欲を持ち、シギについては、タシギ、ダイシャクシギ、イソシギ（絵の中でくちばしの特徴として扱ったものには、オオソリハシシギ、キアシシギ、オバシギがある。）、チドリ

については、オオメダイチドリ、ハジロコチドリなどについて調べた。

これらについて、グループで分担して調べた。国語の時間だけでなく、朝自習などの時間も使って作業は進められた。そして、家庭でも図鑑などで調べ、図と説明文をまとめた。また、5年生の教材なので、4年生として難しい語句については、意味調べをした。

児童は、このようなハンディがあったにもかかわらず、興味を持ち、意欲的に取り組み、グループで協力しながら、図も丁寧に、わかりやすくかいていた。

児童による説明文の例

ダイシャクシギ

〔特ちょう〕

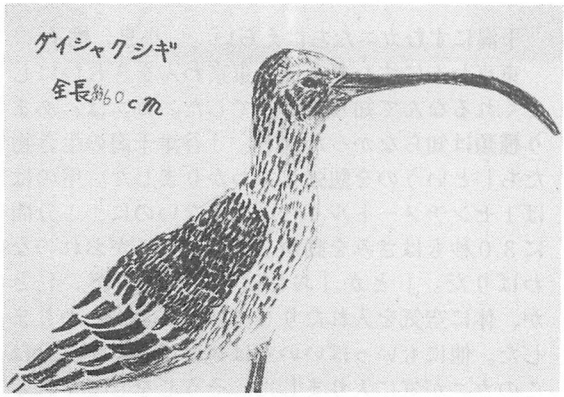
カラスよりも大きく、ホウロクシギと共に日本で最大のシギ。くちばしは、とても長く、下にまがっている。飛ぶと、こしの白が目立つ。

〔しゅうせい〕

海岸や河口の広い干潟に生息する。ゆっくりと歩きながら、くちばしをどろの中にさしこみ、カニ、カイ、ゴカイなどをとって食べる。

〔分布と渡り〕

旅鳥として、北海道、本州、四国、九州、対馬、沖縄諸島に渡来するが、本州中部以南では、越冬するものもある。



タシギ

〔特ちょう〕

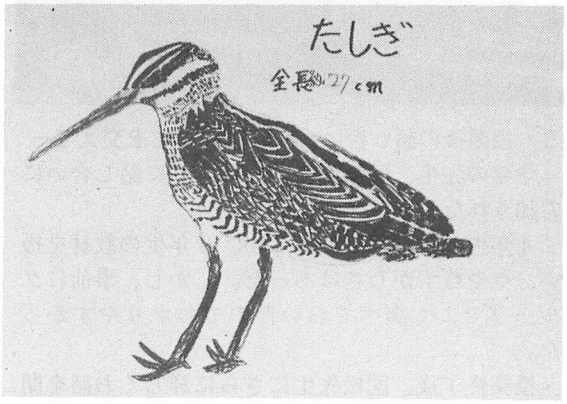
スズメより大きい。くちばしがまっすぐ長く、背中の黄土色のたてすじが目立つ。

〔しゅうせい〕

湿地、水田、はす田などに生息する。日中は草のかげでじっとしており、夕方から活動する。長いくちばしをどろの中につきさし、ミミズや昆虫をとる。

〔分布と渡り〕

冬鳥として、本州、佐渡、四国、九州に渡来する。北海道、対馬、伊豆七島、小笠原諸島、さつ南諸島、沖縄諸島では旅鳥。



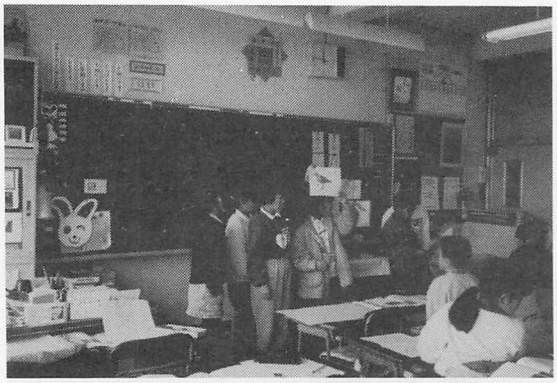
これらの図を利用して発表する仕方としては、自分のクラスの児童の実態をふまえ、段落のまとめ方を学習しながら、新しい段落になった時に、そこに出てくる野鳥や生き物の説明をグループで行っていくことにした。

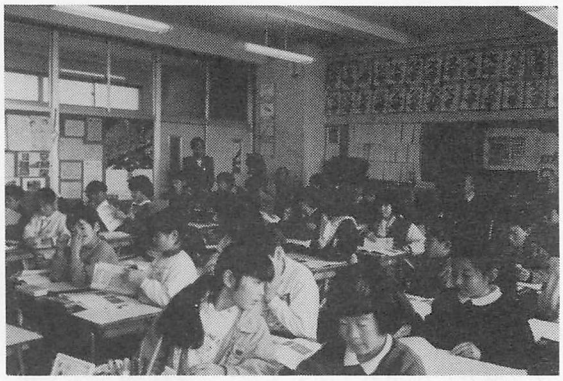
4．授業公開

授業を計画していく段階で“公開”することを考えた。全職員に朝の打合せで呼びかけた。（平成3年3月4日(水曜日)実施）

また、国松先生を当日お迎えし、授業後のご指導をいただけることも決定した。　教材にされた谷津干潟について調査されたことや、教科書の文には記載されていない事などもお話いただけることになり、児童文学者としての色々なお話をおうかがいできることも決まった。

著者と直接お話できることへの期待感があるが、授業参観をしていただくことへの不安もあり、とても緊張をした。





5．授業後の話し合いから－国松先生を交えて－

学年の先生、国語部の先生も熱心に話し合いに参加された。

・４年生の３学期ではあるが、５年生の教材を扱い、ややむずかしさはあった。しかし、事前にグループでよく調べておいたのでわかりやすかった。

・授業終了後、国松先生にさらに詳しくお話を聞くことができ、内容理解が深まり、自然の仕組み、厳しさも知った。

・教師が専門的な内容の教材を扱うのは、むずかしい。

・地域の環境とまったく違う内容の教材は、ビデオやスライドなど、特にビデオなどでその環境を知ることができたらよい。

・干潟のどろの具合が違うことなどの微妙な所が、教師でも感触としてよくわからない。

6．おわりに

自然環境に関する内容を扱った説明文では、段落のまとめ方、漢字の指導だけで終わることのないよう、教師が環境についての豊かな知識を得なければいけないこと、そして、それらを生かした教材の扱い方を工夫することの大切さなど、むずかしさを感じた。

しかし、いずれにしても、大変よい勉強をさせていただいた。

国松先生の「谷津干潟の生き物たち」は、原文は、「わたり鳥のくる干潟」（童心社）であり、その中には、具体的に鳥の種類も多く説明され、児童向けに谷津干潟の様子が詳しく、また、わかりやすく記載されている。

その原文を教科書用に書き直したものが、本教材である。

大阪書籍４年国語「下」にも「干潟の生き物」と題して扱われている。

鳥や自然を扱った説明文の学習は、自分達の身近な環境との違いを見て、自分達の住む周辺の環境を見つめ直し、環境をどう守っていったらよいか考えるよい機会である。常に自分達の身近なところで起こっていること、見聞きしていることに置き換え、考えを深めていくことが大切であり、自然を再確認する場として扱っていきたいものである。

最後に、国松先生に、いろいろとご指導をいただきましたことに、紙上ではありますが、改めてお礼を申し述べたいと思います。ありがとうございました。

なお、授業後の児童の感想を以下に記し、参考資料といたします。

干潟にすむカニたちはえらい　　小泉　桃子

東京わんにすむカニは、東京わんをきれいにしてくれるなんて知りませんでした。カニは、あまり種類は知らなかったけど、「谷津干潟の生き物たち」というのを勉強してわかりました。甲のはば１センチメートルぐらいしかないのに、１分間に３０秒もはさみを動かして、「ここがおれのなわばりだ。」とか「おれはここにいるぞ。」とか、体に空気を入れたりしていることがわかりました。他にもいっぱいいっぱいいましたが、私はこのカニが気に入りました。そうじをしてくれるカニもいたりして、みんな小さい体でがんばっていると、なんだか東京わんの海をよごした人にそうじをいっしょにやらせたくなりました。

生き物の天才、国松先生　　三国　愛

わたしは、生き物の仕組みや鳥の仕組みとかは

あまり知りません。でも、国松先生の話を聞いたら、ほとんどの生き物たちの仕組みがわかりました。わたしは、かわいそうなテレビとかを見るたびに、なみだがでてきます。それと同じように、鳥のかわいそうな話を聞くと、かわいそうでたまりません。でも、楽しいことを聞くと、おもしろいです。でも、本当に知らなかったのは、東京湾のよごれのもとを食べてくれるということです。それを聞いてびっくりしました。でも、せっかく東京湾のよごれを食べてくれるのに、ほかの生き物に食べられるなんて、がっかりしました。でも、わたしは、小さな生き物でも、海や山、木などをきれいにしてくれていることは、わすれません。

谷津干潟の生き物たちを勉強して　御嶽　浩二

ぼくたちは、国松先生の「谷津干潟の生き物たち」を勉強しました。

ぼくが、谷津干潟の生き物たちを勉強して思ったことは、コメツキガニ、ゴカイ、アシナガゴカイ、ヤドカリ、チゴガニ、ヤマトオサガニなどの生き物たちが人間のよごしている海をきれいにしていることが、一番びっくりしました。

谷津干潟にいる生き物たちの生活　種田　珠美

干潟に生き物なんていないと思っていたのに、シギ類やゴカイ、ダイゼン、チドリ類、いろいろな生き物たちがいっぱいいることがわかった。

干潟などは、行ったこともないけれど、こんなにいっぱいの生き物がいるなら、ぜひ行ってみたいなと思った。

東京湾をきれいにしようとしてくれているんだから、生き物たちはとってもとってもえらくて、すごいなと思う。

干潟の生き物たちでわかったこと　出澤　浩子

私は、谷津干潟に、いろいろなカニや鳥がいるのがわかりました。東京湾は、そんなにきれいじゃないのに、なんでそんなに鳥が来るんだろうと思っていたら、そこにはカニや虫がいっぱいいるから鳥たちも集まってくるんだなと、本を読んでわかりました。それに、カニは、谷津干潟のおそうじをしてくれていて、すごいなと思いました。でも、おそうじをしてくれているカニは、鳥に食べられてしまうからかわいそうだなと思いました。みんなが谷津干潟をきれいにしてくれたら、もっともっといろいろな鳥が見られると思います。

谷津干潟の生き物　和田　広太郎

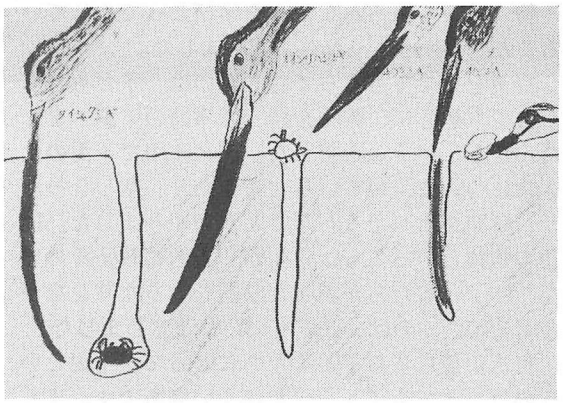
ぼくは、谷津干潟にこんなに生き物がいるとは思いませんでした。海をきれいにしてくれるアシナガゴカイ。人間のよごした海をゴカイとかがきれいにしてくれるとは思いませんでした。

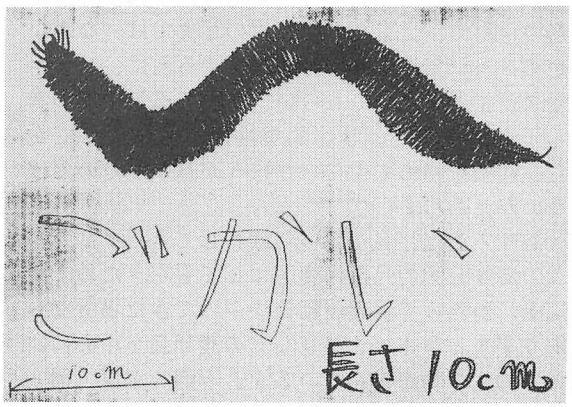
どうして工場をつくるために、こんなにいい干潟をうめたてたんだろうと思った。

谷津干潟の生き物たちを読んで　小野寺　朝美

私は、もっと干潟がいっぱいあればいいなと思いました。そうすれば海がきれいなって、生き物たちがふえるからです。

谷津干潟の生き物たちは、そうじをしてくれるなんてえらいな。もしも、その生き物たちが住んでいなかったらどうなるかと考えると、すごく感謝しなければいけないなと思いました。





「谷津干潟の生き物たち」の授業に参加して

児童文学者　国松　俊英

島田利子先生が「谷津干潟の生き物たち」の授業をやって下さるというので、秦野北小学校へ出かけました。こんな体験は初めてです。自分の作品がどのように授業に使われるだろうか。四年生の子供たちは、作品の内容をちゃんと理解してくれるだろうか。不安やら心配な気持ちがいっぱいで、どきどきしながら教室に入りました。

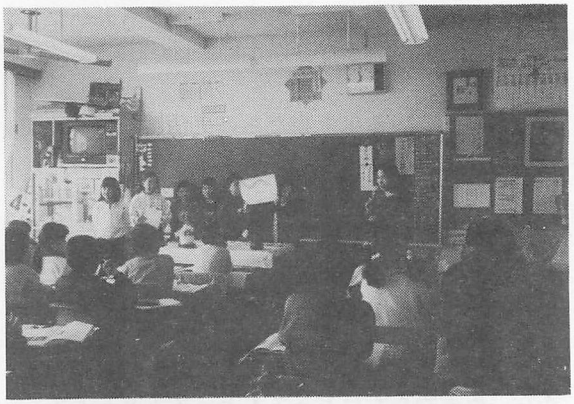
でも勉強がはじまると、そんな心配はすぐに消えました。島田先生のたくみな指導と、子供たちの生き生きした様子にひきつけられて、教室の空気に溶けこみました。そして子供たちが一生懸命にやる発表に、感心しながら聞き入ってしまいました。子供たちがこの作品を読んで、干潟のことをそれなりに理解してくれていること、干潟の生き物についていろんなことを学びとってくれていることがわかり、うれしく思いました。

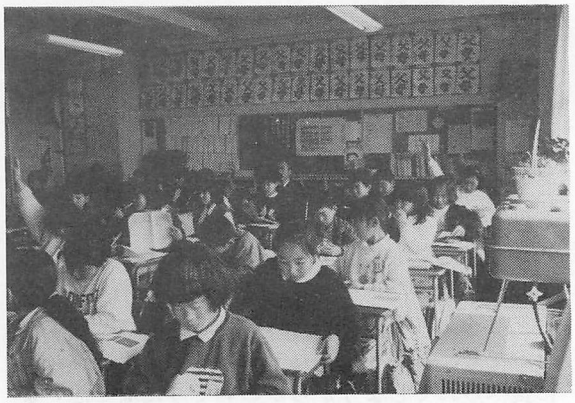
授業を見せてもらって感じたのは、子どもたちがとても熱心に、興味を持って事前の下調べをしたんだなということでした。調べる中で干潟の生き物について、いろいろと考えたり、話し合ったり、疑問を出したりしたことがわかりました。国語の勉強といっても、先生が一方的に教えるのでなく、子どもたちが調べたり話し合ったりしながら考えていくのは、とてもいいなと感じました。

丹沢山麓に住む子どもたちにとって、干潟というのは、とてもイメージしにくい場所です。まして東京湾の谷津干潟は、埋立地に囲まれた特殊な形の干潟で、文章や一、二枚の写真では、なかなかイメージできません。勉強をやる前に、ビデオやスライドを見せてもらい、干潟の風景や潮の満ち干の情景など、具体的な場面を頭に入れてから、勉強を初めてもらったほうが良かったのではないかと感じました。

谷津干潟は、私がずっと観察してきたフィールドであり、国の鳥獣保護区にしてもらうため十年以上にわたって保護運動をつづけてきた場所でもあります。シギ・チドリなどの渡り鳥を中心に、多くの生き物が棲んでいます。干潟・湿原・沼・池・水田……といった湿地は、急速に減少しています。一般的に湿原は、じめじめした虫の多い、何の役にも立たない場所と考えられて、どんどん埋め立てられてきたのです。しかし、湿地の重要性が少しずつ見直されてきて、日本の干潟や湖沼などをもっと大切にしていこうという声が広がってきています。今年の六月には釧路で、国際的に重要な湿地を守るためのラムサール条約の加盟国会議も開かれます。

多くの生き物が棲み、人間にとっても大切な「干潟」のことを、子どもたちにもっともっと知ってもらえたらと思います。そんなこともあって、島田先生が「谷津干潟の生き物たち」の授業をやって下さったことは、とても意義があり、うれしいことでした。すばらしい授業に参加させていただき、ありがとうございました。





村の理科ことはじめ（15）
サクラの花びらは散る

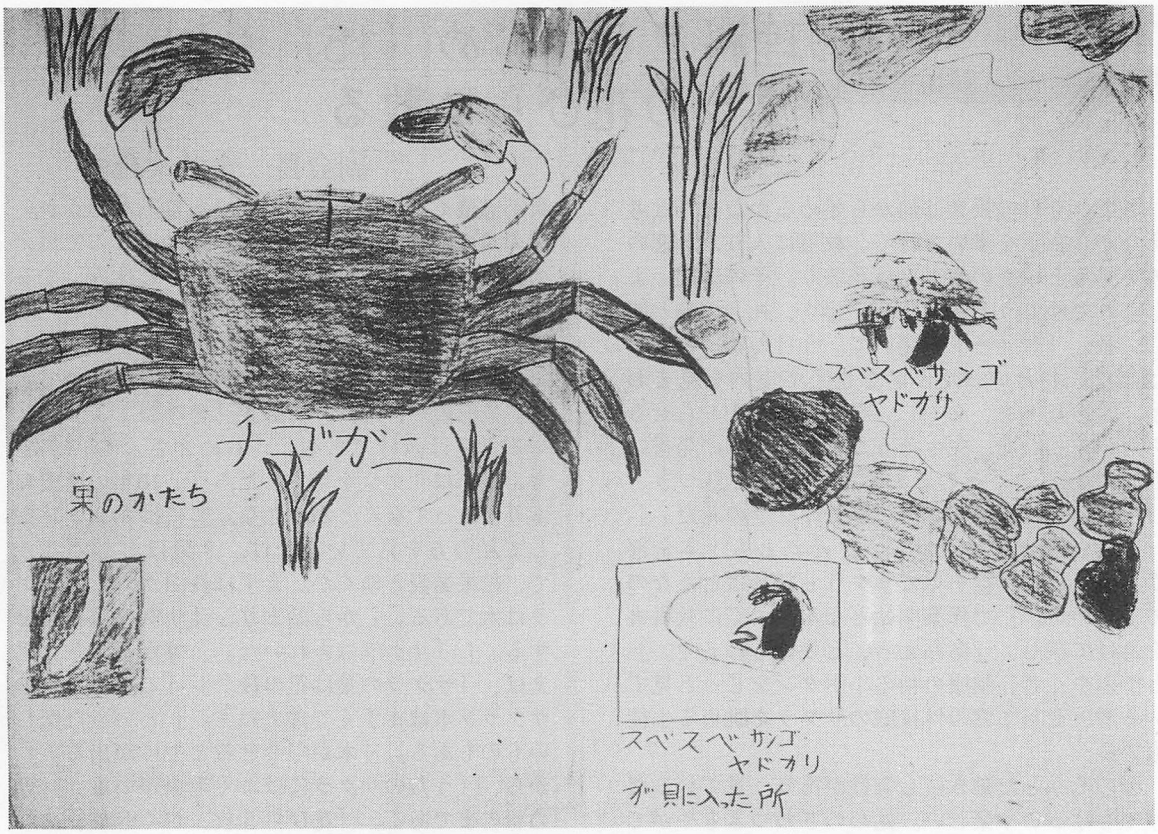
副会長　金井　郁夫

さて、今日の授業は何から始めるかなぁ、と考えながら廊下を歩いて行く。教室に入りふと窓の外を見ると校庭のサクラは花盛り。その瞬間、よしこれでゆこうと決定する。起立、礼、のあと開口一番、「皆ノートを開いて。今日の第一の仕事はだな。」といったん話を止めて室内を見まわす。「ありゃあ、あやしいな。また何かやらせるらしいぞ。なあ、先生そうだんべ。」との発言は西村である。「そのとおり。」でひと息つき、「今日のでだしは絵かき。題はサクラの花だ。」「花あ、１個かいっぱいか。それとも１本全部か。」には、「絵を見てサクラと判ればどんなのでもいいよ。」で作業開始となる。すぐに教科書をあけて探し、「あれえっ、どこにもねえや。」とつぶやく者、制服の袖の小ボタンをじっと見ている者、そして窓の外校庭のサクラを眺める生徒もいる。

皆のそうした動きにも個性があり、見ているだけでもけっこう楽しい。始めのざわつきもやがておさまり、それなりに鉛筆を走らせるようになる。「さーて、そろそろ終りにするかな。どうだい進みぐあいは。」と言いながら見てまわる。「まぁ、こんなもんかな。」はひょうきんな長田だ。「どおれ。」としながら近寄りのぞく。「うん、さすが長田だ。よくできてる。ちゃんとサクラに見えるもんな。」にはまわりの生徒たちものぞき、口々に「さすが長田博士。」とまぜかえす者から、「俺よりうめえことはたしか。」、さらに「いい勝負だな。」と改めて自分の作品を見なおす者等、いろいろな反応が見られる。

教卓にもどり、「今見てまわったら、皆けっこうかくもんだな。花びらは５枚あるし、中にはちゃんと先割れまでかいている名人もいるしなぁ。だけど花びらをけちって４枚にしたのもいたなぁ。それは何だっけ。」にはすかさず、「ナの花」「アブラナ」の答が返ってくる。「さすがムラの子。よく知ってらあ。」には多くの生徒は嫌な顔をする。「さーて、花はほぼ全員合格。となれば次の仕事といくか。」に、「なぁーんだ。まだサクラかよ。」「そうなんだって。サクラは日本の国花。なら日本の国鳥は何かな。」と言いながら板書。国花・サクラ、国鳥・？とする。全員不思議そうに見ているだけである。「そうか。国の鳥は知らねぇか。じゃあついでにここで憶えておけ。それは桃太郎の」でまたひと休み。すると、「なぁーんだ。キジか。」は谷合である。そこで？を消して、キジ、と書く。

「次の仕事は、何でもいいからサクラについて書け。最低限一行だ。」に必ず「書けねぇよ。」とやる常連は西村である。「おめえさんも13年生き、10年はサクラを見てんだろう。10年の歴史をふりかえってなんとか書きな。」にはキョトンとして私の方を見ているだけ。３分ほどして「さて、結果発表とゆくか。まずは長田か。」「サクラは木である。」から始まり、「サクラは花見をする。」「サクラはきれいだ。」等があるかと思えば、「サクラの葉は花の後。」「このあたりのサクランボはまずくて食えねぇ。」といった楽しいものもある。「木が年令とるとやにが出る。」から、「うちのサクラにはよく毛虫がいる。」等の報告まである。「花びら５枚、がく５枚、おしべいっぱい、めしべはひとつ。」と書き並べた者もいる。そのうち西村が、「サクラの花びらは散る。」と言ったところ、皆おお笑い。「あれえっ、そんなにおかしいか。」「だって、あたりまえのことじゃんか。」の長田発言に多くはうなづく。「そうか。そのあたりまえなところに大事なことがあり、うまい発言だなと考えていたんだ。」には全員驚いたようである。そこで、「サクラの花びらは散る。散るということは」で止めて見まわす。「風にとぶ。」「ひらひらする。」「吹きだまりになる。」「水の上に乗る。」等の発言が続く。「そんな時、花びらは」には、「みんなバラバラ。」「１枚ずつだ。」となる。そこで、「サクラの花びらは」で休むと、谷合が「１枚ずつ離れてる。」とまとめる。「そう。だからサクラのように花びらが１枚ずつ離れている仲間を、離弁花と言うんだ。」と話すと共に板書する。そして、「このグループにはウメ、モモ、スミレ、アブラナ等がある。」と言いながら書き足す。そして、「花びらが着いたままで引っぱるとやぶけるのは」に、「ツツジ」「アサガオ」「ツバキ」と答える。「それは合弁花と言う。」に、さっきの笑いはどこへやらである。



編集後記

松原先生に特別にお願いして、実物大の身近な野鳥の絵を描いていただきました。

これは、入門者の図鑑として使えるようにと、レイアウトも含めて先生にお願いしたものです。

今回特別付録として、皆様にお送りいたします。平田寛重氏によるチェックリストと解説も含めて、どうぞご活用ください。

なお、この絵については余分に印刷してあります。授業の教材として、また、地域でのバードウォッチングの指導の際にご利用ください。カラーコピーをとるよりも安くてきれいな仕上りになるはずです。

詳しくは、事務局までお問い合わせください。私自身も、上記のような目的で、数百単位の購入を検討しているところです。

４３号の発行が遅れておりますが、すでに原稿の入力段階ですので、今しばらくお待ちください。

（杉田）

愛鳥教育 No.42

平成５(1993)年３月３１日

発行人　江袋島吉
発行所　全国愛鳥教育研究会
住　所　〒162 東京都新宿区弁天町１番地
三河屋ビル3F
（財）日本鳥類保護連盟内
電　話　０３－３２０５－７８６１
ＦＡＸ　０３－３２０５－７８６３
会　費　3,000円
郵便振替　東京８－１２４４２
印刷所　祐　文　社

愛鳥クイズ

【前回の解答】

A：コガラ　　B：シジュウカラ　　C：ヒガラ
（参考：日本野鳥の会「日本の野鳥増補版」）

ふだん、何気なく見ているシジュウカラでさえも、気をつけて見ると、いろいろな識別ポイントが見えてくるものです。白い胸に黒いネクタイだけでは識別できない時もあります。光線の関係で後方や斜め後ろしかはっきりしない時や、混群の中でなかなかこちらを向いてくれない時などは、いくつかの識別ポイントを知っていると好都合です。顔や胸の模様や冠羽の様子だけでなく、雨覆の模様や後頭部の模様など、種によっていろいろなものがあります。これらの形態にもきちんとした意味があるはずです。慣れてくれば、鳴き声や大きさでもわかってきますが、数多く観察しなければやはり、すぐにはわかりません。鳥を見る時にしっかりと見ることが大切です。

形態や行動について、「尾羽の色はどうなっているのだろうか？」「枝に止まったあとどうするのだろうか？」というように、ただ漠然と見るのではなく、思いを入れて見てほしいものです。鳥を見ることによって、まわりの自然とのつながりも見えてきます。鳥を見ることによって、鳥たちが送ってくれるシグナルを読みとり、その意味をさぐり、自然のしくみを学んでいくのです。

【今回の問題】

今回は、数量的な問題にチャレンジしてください。

1.スズメの体重は、５００円玉より、軽いか、重いか？

2.ホオジロの羽の数は、次のうちのどれでしょうか？。

①約１０００枚　　②約２０００枚　　③約３０００枚